

# 教員の授業力の育成と学校づくりに関するコンサルテーション

研究代表者氏名 谷口 知美

共同研究者氏名 船越 勝 越野 章史  
二宮 衆一

連携学校名 紀の川市立貴志川中学校

## 1. 研究の趣旨

受験競争のプレッシャーが中学生に困難と生きづらさを押しつけていること、「自分崩し・自分づくり」(アイデンティティの解体と再編)の時期に中学生があたっているといった制度的条件が中学校にはある。それだけでなく、現代の子どもたちの変容、保護者や地域住民の変貌が中学校をめぐる困難をいっそう大きなものにしてている。だからこそ、中学校は、逸脱行動も表面に現象してくる時期に当たり、実践的な困難に直面せざるをえない。

しかし、こういった困難ななかにある中学校に対する制度的なサポート体制は、十分に構築されていない。教員の実践的な指導力の中核をしめる中学校の教員の授業力の形成は、学校づくりのなかでもっとも重要な課題のひとつである。

こうしたことをふまえて、一人ひとりの生徒が生き生きと活躍できる学校づくりを進めていくために、授業の参観およびそれにもとづく研究協議に参加して、授業力の形成を中心とした学校や教員の課題克服に向けた指導助言をしてきた。

## 2. 今年度の活動

貴志川中学校との共同研究は、今年度で13年目になる。毎年多くの教職員の異動があり、これまでの取り組みをどう継承、発展させ、教員全体の授業および生徒理解の力量をどう高めていくかを問うてきた。

共同研究を進めていくなかで、教員全員が2年に一度は研究授業を実施し、授業を見あう文化がつけられてきた。その反面、逸脱行動の減少等、生徒が落ち着いてきたなかで、当初の危機感が薄れて授業研究を「こなしている」部分があることが否めない。

そこで、今年度は、貴志川中学校の教職員が主体となり、貴志川中学校の課題を明らかにして、研究テーマをつくりあげていくというプロセスを重視し、取り組みを進めた。

### ①6月2日 授業研究部との話し合い

管理職2名、授業研究部の教諭3名、教務主任、谷口で、貴志川中学校の課題、昨年度の少人数指導の良さ等を出し合い、今年度の共同研究の方向性を議論した。主な意見は、下記の通りである。

- ・連携事業が始まった12年前と生徒の状況も変化し、「すべての生徒が参加する授業が最高の生徒指導だ」というスローガンで頑張ってきた教職員たちも異動し、授業研究は残っているけれどもマンネリ化、義務化し、授業も「こなす」感じになってしまっている。
- ・今年度は、教職員がいま感じている貴志川中学校の良いところと課題を出し合って、研究テーマを決めるところからみんなで取り組みたい。一学期は研究テーマを決めることがテーマという感じで、教職員を6グループに分けて意見交換をする現職教育を6月にしよう。授業研究部が中心となって管理職とともに立案する。
- ・研究授業をイベント的におこない、そのときだけ和大的教員がくるのではなく、研究授業に至るまでの過程(普段の授業の参観等)にも和大的教員に関わってもらいたい。

## ②8月2日 校内研修

授業研究部が中心となって校内研修が企画・実施され、越野・谷口が参加した。

教員は教科ごと(音楽技家は1グループ)に分かれ、下記の二つのテーマについて話し合い、全体で共有したあとに、大学教員がコメントをした。

- (1)基礎学力がつかなくて授業で困っている生徒がいると思います。基礎学力を定着させるために、どのような取り組みがありますか。(授業の中だけでなく、授業外でも良い)
- (2)「主体的に学習に取り組む態度」を評価するのに、どのような材料をもとに評価しますか。

議論のなかでは、そもそも「基礎学力」とは何なのかと問いつつ、教科ごとに基礎学力の定義を提示したり、「やる気はあるけれど学力が低い生徒は、読解力や表現力が足りないのではないか」、「体験を通して他者に説明する、繰り返し鍛えていく必要があるのではないか」といった具体的な生徒の実態を出し合って分析したり、各教員が授業内外で試行錯誤している取り組みを認め合ったりするなど、子どもの現状をもとに教職員が自分たちのことばで研究の方向性をつむいでいくこととなった。

## ③11月2日 授業研究

例年は年に二回実施していた授業研究だが、先述のように今年度は研究テーマをつくりあげていくことを主眼としたため、11月に一度だけ実施することとなった。船越・二宮・谷口が参加した。

- ・5限 研究授業(1年生社会科・数学科、2年生英語科・国語科、3年生保健体育科・理科)
- ・研究授業別協議会
- ・全体協議会

研究授業は、担当教科をこえて当該学年の教師たちが参観し、研究授業別協議会では、プレ授業からの変化や授業のなかでの生徒のようすを語り合いながら、授業のふりかえりをおこなった。8月の校内研修で議論した2テーマについても、授業をもとに話し合った。

全体協議会では、研究授業別協議会での議論を共有した後、大学教員および指導主事からコメントをした。主な内容は次のとおりである。「生徒の良さ、関係の良さがわかった」、「学習課題の工夫はされていたが、学習活動の工夫には課題があった」、「当該科目に苦手意識のある生徒もタブレットの使用等で取り組みのハードルが下がり、グループワークで生き生きと語りだし、学びの主体になっていた」、「1グループ7名編成だと待つ時間が多くなる」、「問題が解けたら、まわりの子を助けるという取り組みは、助けてもらう側が独力で解く時間が確保されていない。それを主体的に取り組む態度の評価にして良いものか」。

## 3. 今後について

貴志川中学校では、学年別協議会を大切に育み、「教科の壁」を越えて、生徒理解、どの子も参加する授業づくりを進めてきた。生徒指導と授業づくりを別立てで議論するのではなく、授業のなかの具体的な子どもの姿、事実を出し合うことが肝要であり、それが学校づくりを支える核となると私たちは貴志川中学校から学んできた。

今年度は、貴志川中学校の教職員が学校の課題を明らかにして研究テーマをつくりあげていくことが、共同研究の中心となった。借り物の言葉や、どこかから下りてきた言葉ではなく、日々貴志川中学校の生徒たちと関わってきた教職員が現状を直視し、分析し、目指すべき学校・子どもの姿について議論してきたことの意義は大きい。今後も、その地道な取り組みに学び、伴走していきたい。

# 「授業づくり」を基盤とした「学校づくり」 ～ 生徒が中心の授業づくり ～

紀の川市立貴志川中学校

10数年前、授業エスケープ状態があり、職員室のインターホンが頻繁に鳴り、その対応に職員が追われるといった状態が続いていた。また、一部の生徒の問題行動によって学習環境が崩れ、いわゆる学校の荒れを経験した。そこで、和歌山大学の御協力のもと、この状況を改善する方策として「すべての生徒が満足する授業こそ、最高の生徒指導である。」というスローガンを掲げ、授業を中心にした改革で、学習環境を安定させるよう全教職員が教育活動に取り組んできた。今では、授業エスケープがほぼなくなり、生徒は荒れのない中学校生活を送ることができるようになってきている。

その後の授業改善に取り組む中で、和歌山大学の先生方の指導の下、「生徒がいかに活動しているか」、「教師がいかに生徒を活動させているか」に焦点をあて、「生徒が中心の授業づくり」に取り組んできた。授業スタイルも様々な形を採用し、授業内容では、“ワクワク感”や“ドキドキ感”を抱き、生徒にとって「わかりやすく、楽しくて、役に立つ授業」の構築を目指してきた。

具体的には、

- \*教師の話を一方的に聴くばかりではなく、自分の意見や考えを言える授業
- \*教師の話に、生徒自らも加わり、自分の意見や考えを述べることができる授業
- \*作業や実習などを伴い、生徒同士のコミュニケーションが深まる授業

このような授業を展開するためには、授業を観る中で改善点を指摘し合い、それらの意見を参考にしながら授業案を再考し、再度授業を行うというプロセスが必要である。

研究授業前にプレ研究授業を実施し、生徒目線にたった様々な教科の参加者から得られた授業に対するコメントを参考に指導方法を改善し、研究授業を実施してきました。

令和4年度は、現在は当初のような荒れの状況から変わってきている中で、新指導要領の完全実施、一人1台タブレット端末の導入などによる今日的課題に対応するため、**新たなスローガン**を掲げて、授業づくりの質を高め、将来につながる学びにさらに力を注いでいきたいと考えた。

## 本年度の取り組み

まず、これまで6月と11月に各学年2クラスずつ3学年で研究授業を行い、各回6名の先生が授業を行うため、2回合わせて12名の先生が授業を行ってきた。これに加えて、教育委員会による学校訪問時の研究授業などを合わせると、全教師が2年に1回は何らかの研究授業を経験することになり、それにより、「観られること」「観せること」への抵抗がなく、普段から、「い

つでも、誰でも、どうぞ」という雰囲気が築かれている。さらに、研究授業前に必ず行うプレ授業では、教科の枠を超えた様々な視点からの授業者へのアドバイスを授業改善に役立っている。

しかしながら、上記のようなメリットがある一方で、これらが形骸化してきていることは否めない。また、新指導要領の完全実施や、GIGAスクール構想による一人1台タブレット端末の活用といった新たな状況も踏まえ、4月に行われた授業研究部による第1回目の部会で、今日的課題に即した取り組みを、一から始めるはじめることを確認し、以下のスケジュールを計画した。

4月・5月 授業研究部での年間計画の策定と、各事業ごとの詳細を検討

6月 本校の今日的課題を明らかにするため、現職教育を実施。

- ①これまでの経緯の共有
- ②各教科ごとに分かれての協議により、課題の洗い出し
- ③各教科から出された課題の共有
- ④和歌山大学の先生方からの助言

7月・8月 授業研究部で6月の現職教育での協議内容をまとめ、今年度の研究主題の検討

9月 職員会議にて、主題の発表と、今後の研究体制の提案

職員会議での提案内容

今年度、以下の主題に取り組み、11月に研究授業を実施します。

1. 研究主題について

- ① 基礎学力を定着させるための工夫がされている授業
- ② 生徒が主体的に取り組める工夫がされている授業

生徒が基礎学力を定着するためには、主体的に取り組むことが必要で、また、主体的に取り組めるためには、基礎学力が定着していなければなりません。すなわち、①と②は必要十分条件となっています。

①については、例えば、授業開始直後の「前時のふりかえり」、「復習」や、授業内での「ペア学習」「高速インプット」や、授業最後の「本時の授業で分かったことを文章に書かせる」などが挙げられる。

②については、授業に参加しにくい生徒（すぐ寝る、ノートを書かない、おしゃべりが多いなど）が少しでも授業に参加できるような工夫をして、その生徒がどのように良く変わってきたかという過程を見ていくというものです。もちろん、他の生徒がどんどん意欲的に取り組んでいく工夫も大事です。

## 2. 研究授業について

### ・11月2日予定

- ・抽出生徒が変わっていく様子などを記録（記憶）しておく

※後の研究協議では学年別で行うので、学年群で共有できる

10月 研究授業者によるプレ授業実施

11月2日 研究授業・研究協議の実施

### 11月2日のスケジュール

① 研究授業（13：45～14：35）

② 学年別協議会 ※各学年で2班ずつでの研究協議)

- ・表に付箋を貼り、主に、2つのテーマ(主題)について協議する。(KJ法)

※特定の生徒については、教科の枠を越えて交流する。

※テーマ以外のことについても、あれば協議してもよい。

項目	基礎学力を定着させるための工夫がされている	生徒が主体的に取り組める工夫がされている	その他
良かった点	赤い付箋	赤い付箋	赤い付箋
課題点	青い付箋	青い付箋	青い付箋
助言・手立て	黄色い付箋	黄色い付箋	黄色い付箋

③ 全体会

- ・学年別協議会での協議内容の発表
- ・和歌山大学の先生方、及び紀の川市教育委員会の指導主事からの助言
- ・校長より

1月・2月 成果の検証・総括(授業研究部会、及び職員会議)

## 成果と課題

現在、成果の検証中であるため、定量的な総括は未だであるが、当初の課題であった形骸化されてきた授業研究に対して、大きな風穴があいたのは確かである。特に、これまでは各個人指導

技術の向上を主眼に置いてきたものが、「**基礎学力の定着**」と、「**生徒が主体的に取り組める授業**」という共通の課題意識を持つことで、全ての職員が自らの日頃の実践を、研究授業や現職教等を通して重ね合わせることができ、研究協議での話に深みが加わったように思う。

今後、定量化された数値を元に、基礎学力の定着度合いを、定期的にモニタリングし、さらに、それによって得たデータを元に工夫を重ねていくことが重要である。

今年度動きはじめたこの研究体制や雰囲気、年度や職員が変わっても継続していけるかどうかは今後の課題であると考える。